



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第64号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2015-05-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73619
Type	journal
File Information	DRFmonthly_64.pdf



第64号

No.64
May, 2015

【特集】機関リポジトリ新任担当者研修受講生に聞く！講義内容レポート

【連載】いまそこにあるオープンアクセス



機関リポジトリ新任担当者研修受講生に聞く！ 講義内容レポート



4月号で機関リポジトリ新任担当者研修をレポートしたけど、もっと詳しい内容が知りたいわね。

それは良い考えじゃな！
では、受講生に講義内容を詳しくレポートしてもらおうかの。



講義一覧

講義名	東日本会場	西日本会場
機関リポジトリ概論	p.2	—
紙資料の電子化	p.2	
メタデータ	—	p.2
著作権及び著作権譲渡契約	—	p.3
広報活動とコンテンツ収集	—	p.3
コンテンツ構築のルーチン	—	p.3
構築・運用事例報告	p.4	—
設立・導入の戦略	p.4	
研究者・学術研究プロセス	—	p.5
学位規則改正と機関リポジトリ	p.5	
機関リポジトリのこれから		p.5

◆東日本会場◆

日時：平成27年2月20日（金）

10：00～17：45

会場：東北学院大学 土樋キャンパス
8号館第3・4会議室

◆西日本会場◆

日時：平成27年2月27日（金）

10：00～17：30

会場：岡山大学附属図書館 中央図書
館本館3階 セミナー室

機関リポジトリ概論

講師：鈴木 雅子氏（静岡大学図書館 東・西共通）

蔵野 果穂

（東北学院大学・東日本会場受講）

最初の研修プログラム、静岡大学の鈴木雅子氏による「機関リポジトリ概論」では機関リポジトリの成り立ちから構築後の業務内容まで幅広くご説明頂きました。研究者と出版社の関係を表現した大変分かりやすい寸劇からスタートし、そもそもオープンアクセスとは何か、機関リポジトリは研究者にどのようなメリットをもたらすのか、という根本的な考えを改めて理解することが出来ました。

また、構築後の機関リポジトリ業務には決まったやり方がなく、その大学に一番合った方法で進めることが重要であるというお話が大変印象的でした。これまでの事例として、「キリ番インタビュー（コンテンツを100件登録するごとに教員にインタビューをして公開する）」や「いいとも作戦（友達紹介方式で登録して頂いた教員に他の教員を紹介してもらう）」などをご紹介頂き、各大学でコンテンツ収集のためにされてきた、工夫を凝らしたユニークな取組や教員への働きかけが大変参考になりました。

自学でも、機関リポジトリが活用され、研究者にとってより身近な存在となれるよう継続的な広報活動が不可欠である、ということを再認識する機会となりました。大変貴重な場を与えて下さった関係者の皆様、ありがとうございました。

講義資料：【東日本】<http://id.nii.ac.jp/1280/00000085/>
【西日本】<http://id.nii.ac.jp/1280/00000097/>

紙資料の電子化（東日本会場のみ）

講師：森下 映理氏（奈良女子大学学術情報センター）

佐々木 由樹

（東北文化学園大学・東日本会場受講）

この研修では、機関リポジトリに収録する資料をPDFデータ化する流れを大きく3つに分けて説明いただきました。第1章PDFの成り立ちの違いでは、同じPDFでも電子媒体由来か、紙媒体由来かによって、検索結果に違いが出るといった事例の紹介がありました。第2章紙資料の電子化は、電子化までの工程についての、裁断機の種類やスキャナの設定方法といった具体的な体験談を踏まえた内容でした。特に、スキャナの設定による画質の違いについては、画像データを比較しながら解説いただいたことで、より理解を深めることができました。第3章OCR処理では、代表的なOCRソフトである「e.Typist」「読取革命」「Acrobat」について、体験談を元にした具体的な長所・短所を聞くことができ、ソフトを選ぶ際、どこに着目すればいいか大変参考になりました。

紙資料の電子化は、機関リポジトリを公開する上での基本となるので、今回の研修で学んだことを活かし、自館のリポジトリのさらなる活性化につなげたいです。

講義資料：<http://id.nii.ac.jp/1280/00000093/>



メタデータ

講師：杉山 智章氏（静岡大学図書館 東日本会場）

大園 隼彦氏（岡山大学附属図書館 西日本会場）

川村 拓郎

（広島大学・西日本会場受講）

この講義では、機関リポジトリにおけるメタデータについて、次から述べるような説明がありました。

機関リポジトリにおけるメタデータは、収録されたコンテンツ(データ)の書誌情報です。機関リポジトリのメタデータは、様々な外部サービス(例えば、CiNiiなど)で利用できることが求められます。外部サービスと連動することで、様々な場所からのコンテンツへのアクセスが可能となります。

機関リポジトリが持つメタデータの項目や記述方法には標準化されたものではありません。しかしながら、外部提供の際には、メタデータはそれぞれのサービスで読み取れる形式である事が必要です。つまり機関リポジトリ内部で持っているメタデータは、それぞれのサービスへ適する形に変換され外部へ提供されます。この変換はクロスウォークと呼ばれています。また、データ提供はOAI-PMHというプロトコルに基づき行われています。

この講義で理解したことは、リポジトリ担当がメタデータに関して行うことは、機関リポジトリ内で持つメタデータ項目や記述方法の検討、それぞれの外部サービスに合わせたクロスウォークの設定、という事です。また、この講義や研修全体を通じ、得られた/整理できた知識は、現在業務を行う上でも大変役に立っています。

講義資料：【東日本】<http://id.nii.ac.jp/1280/00000088/>
【西日本】<http://id.nii.ac.jp/1280/00000099/>



紙資料からPDFを作成する

機関リポジトリ新任担当者研修東日本会場
2015年2月20日
森下映理（奈良女子大学学術情報センター電子情報係）
eri@cc.nara-wu.ac.jp

著作権及び著作権譲渡契約

講師：森 一郎氏（信州大学附属図書館 東日本会場）
大園 岳雄氏（香川大学附属図書館 西日本会場）

青柳 和仁
（島根大学・西日本会場受講）

香川大学の大園岳雄氏による講義で、もう少し時間が欲しかったところですが、図や表を交えた解説でわかりやすかったです。個人的にポイントだと思った点を以下にまとめてみました。

機関リポジトリに関わる著作権には、主に「複製権」と「公衆送信権」があり、公開するには両方の許諾を得る必要があります。そして、この著作権（の一部）は最終原稿が投稿された時点で、著作権譲渡契約を結んで学協会や出版社に移譲されることが多いです。著作権が学協会・出版社に譲渡されていた場合、利用許諾が得られれば公開できます。しかし、公開のための条件（著作権ポリシー）を指定しているところが多く、条件の内容も学協会・出版社によって様々なので、著作物利用の許諾願いを出す前に著作権ポリシーの確認も必要となります。著作権ポリシーについては、国内学協会についてはSCPJ、海外出版社についてはSHERPA/RoMEOで確認することができます。

講義資料：【東日本】 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000089/>
【西日本】 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000098/>

広報活動とコンテンツ収集

講師：鈴木 雅子氏（静岡大学図書館 東日本会場）
松本 侑子氏（広島大学図書館 西日本会場）

横田 陽子
（岡山県立大学・西日本会場受講）

○広報活動：自然と集まる仕組みを目指して、知ってもらうことから始める

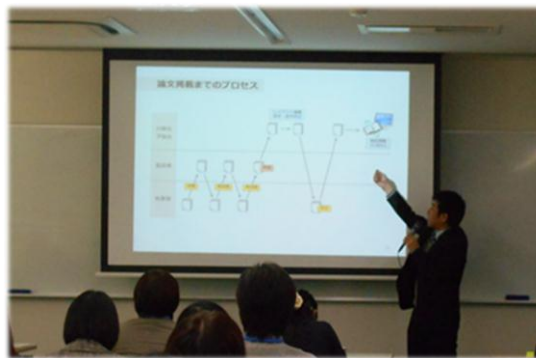
○コンテンツ収集：種類と著作権処理の方法を知り、焦点をあててアプローチする

他部署での業務（「外部資金関係」「業績データベース」など）に、機関リポジトリを組み込んだ仕組みづくりや、研究者から学内関連部署まで定期的な人員の入れ替わりがあるため、既構築機関となっても広報活動第一段階の「知ってもらう」は、継続して効果のある広報活動となるなどご説明をいただきました。

また、研究者へはコンテンツ提供時「手間がかからない」と感じられるようコンテンツを絞り、「利用されている」と感じられる「ランキング」「利用状況（フィードバック）」などの整備をしたうえで、著作権処理など事前調査したものを研究室訪問から教授会まで幅広くアプローチするといった流れはとても効果的だと思いました。

受講してみて、他部署との連携を図るにあたり把握しやすいコンテンツを絞った事前調査・準備、研究者への広報の方法や自館の整備すべき課題など具体的に考えることができました。講師・スタッフ・情報交換をしてくださった参加者の皆様、ありがとうございました。

講義資料：【東日本】 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000090/>
【西日本】 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000100/>



コンテンツ構築のルーチン

事例報告：京都大学図書館・筑波大学附属図書館（東日本会場）
金沢大学附属図書館・東京歯科大学図書館（西日本会場）

上原 藤子
（沖縄科学技術大学院大学・西日本会場受講）

「コンテンツ構築のルーチン（学術雑誌収集1、2）」はコンテンツ収集をどのように継続的に取り組んでいるのかという実践を知るのに役に立つ講座でした。金沢大学の橘洋平氏からは最新論文収集について、図書館がScopusとJ-Stageから情報を収集して教員へ登録を促している実践例を詳しくご説明いただきました。月別作業実績等も報告されていたので業務量の把握に大変参考になりました。東京歯科大学の阿部潤也氏にはPubMed、医中誌Web、Scopusからのアラート情報を得る方法、RSSから情報を得る方法をご紹介いただきました。お二人とも持ち時間が15分ずつでしたが、個人的にはもう少し長くても良かったなと思いました。このように積極的に教員への働きかけをしても回答率は低いということを知り、機関リポジトリを継続的な事業として育てていくことの難しさを感じました。この講座の講師に限らず他の講座の講師の方からもリポジトリに対する図書館職員の努力や熱意を感じることができて私自身への良い刺激となりました。これから一から機関リポジトリを立ち上げる際のいろいろなヒントを得られ大変有意義な研修となりました。講座関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

講義資料：
【東日本】 京都大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000094/>
筑波大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000095/>
【西日本】 金沢大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000103/>
東京歯科大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000104/>

コンテンツ構築のルーチン Scopusを活用した最新論文の収集 金沢大学附属図書館の事例

機関リポジトリ新担当研修発表資料（2015年2月27日（金）岡山大学）

金沢大学情報部情報企画課副課長
橋 洋平



広報活動と コンテンツ収集

機関リポジトリ新担当研修
平成27年2月27日 岡山大学（西日本会場）

広島大学図書館学術情報企画グループ
松本 侑子
ymatsu@hiroshima-u.ac.jp

構築・運用事例報告

事例報告：田園調布学園大学図書館・東北学院大学図書館（東日本会場）
岡山大学附属図書館・鳥取大学附属図書館（西日本会場）

小原 陽子

（富士大学・東日本会場受講）

事例報告では田園調布学園大学図書館と東北学院大学図書館での機関リポジトリ構築に至るまでの経緯が紹介されました。両館とも設立時の課題である人材不足やシステムの習熟・専門知識不足を解消するためにJAIRO CloudやDRF（デジタルリポジトリ連合）のコミュニティを活用した点が挙げられました。

田園調布学園大学では導入時に学内合意を得る際に、機関リポジトリの理解・協力を呼びかけインターネット公開へのマイナスイメージの払拭に努めたことや、コンテンツについては広く社会貢献を果たすため授業で使用した教材も収録対象とし、小規模図書館ならではの設立におけるメリット・デメリットを挙げた上で今後安定的なサービス提供への課題が報告されました。また東北学院大学では、機関リポジトリが推進された背景としてトップダウンの指示が非常に大きかったことの他に①「JAIRO Cloud」サービス開始②DRF加入③2012年7月「学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について」（文科省）の3点が挙げられました。また各大学での自学「ならでは」の機関リポジトリ構築を提案し、自学の強みを活かした地域と学生・教員をつなぐ「知」のハブ的役割として機関リポジトリが貢献できることをしようと提案されました。設立後の変化として学内全体での研究への機運の高まりや企業からの反応等が紹介され、機関リポジトリが大学の研究促進・開拓に貢献していることが実感される状況が報告されました。

機関リポジトリ設立までに紆余曲折を経ながらも、問題点を明確にして取組んできた経緯が非常にわかりやすく、2つの事例報告は今後構築を検討している図書館へ設立へのエールを送ってくれています。

講義資料：

【東日本】田園調布学園大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000091/>
東北学院大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000092/>
【西日本】岡山大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000105/>
鳥取大学 <http://id.nii.ac.jp/1280/00000106/>



設立・導入の戦略（東日本会場のみ）

講師：三角 太郎氏（千葉大学附属図書館）

西本 吉宏

（東京工科大学・東日本会場受講）

本講義では「機関リポジトリの継続的な運用」に向けて、計画・準備・構築・運用の際に重視すべき点をご教示いただきました。

- 計画：まず機関リポジトリについて、自機関ではそもそも運用すべきなのか、どう位置付けるかを自機関のミッションやポリシーに沿って整理し、機関リポジトリのミッションを明確に策定します。長期的なロードマップを描くことが重要です。各種報告書や省令、通知等が参考となります。
- 準備：機関内合意の方向性は「機関リポジトリは機関全体の事業として実施し、図書館は運営に主導的な役割を果たす」とするのがおススメです。経営層や教員層の協力者が必要です。運用方針・規定では、登録の可否基準や削除について明示します。メタデータ入力マニュアルは、その都度の判断が必要ないレベルで用意しておきます。設立段階での決定事項は後からの変更が難しいです。
- 構築：作業記録や議事録を残し参照できるようにしておきます。
- 運用：コンテンツ収集やシステム運用、人材育成等、安定的な運用が重要です。
- 質疑：登録謝絶の事例としては、学術的と判断しにくい絵や歌、自機関とは無関係の成果物、査読落ち論文等の例もありました。

機関リポジトリ未構築の立場で受講しましたが、実際の構築・運用例に基づいた内容で、運用経験がないと予測しにくいようなことも多く、大変勉強になりました。

講義資料：<http://id.nii.ac.jp/1280/00000087/>



研究者・学術研究プロセス

講師：梶内 新氏（北海道大学特任教授 東・西共通）
岡本 健氏（奈良県立大学准教授 西日本会場）

坂本 里栄
（西南学院大学・西日本会場受講）

世界的に注目されるような研究成果の再発見なんて本当にあるのだろうか……心のどこかで、そう思っていました。しかし、先入観を捨ててフラットな気持ちで取り組むことで、自分が担当している機関リポジトリから、新たな発見があるかもしれません。先入観なく過去の紀要類の登録に取り組み、また、新しい活用方法として教育成果での活用に注力する。著作権処理など面倒なこともあります。その一端を担うと思えばなんと楽しいことではないでしょうか。

このように前向きな気持ちになれたのは、本研修を受講したことで、知らず知らずのうちに、うちは文系・理系だからとか、研究がメインの大学ではないから、といったレッテルを貼っていることに気付かされたことが大きいです。

本研修では、北海道大学の梶内新先生と奈良県立大学の岡本健先生とが、ベテラン・若手、それぞれのお立場で、機関リポジトリの活用事例や今後の期待を講話いただきました。研究の視点から特に印象深かったのは、ベテラン研究者の梶内先生から、機関リポジトリへの登録が、研究成果の再評価、ロングテールな引用に繋がった事例について、ご紹介があったことです。なかでも、「北大理学部紀要（動物学）」に掲載された故坂上昭一氏のハチの論文群が、機関リポジトリに掲載され世界的な再評価と膨大な被引用に繋がった事例は圧巻でした。

教育の視点からは、岡本先生の教育での活用事例が大変参考になりました。私の所属大学には、学内助成金による教育プログラムがあります。しかし、成果のリポジトリへの登録はされていません。組織内の動きにアンテナを張り、このようなプログラムの成果発表を取っ掛かりとして、教育成果の発表の場としても機関リポジトリを提案していけるようになりたいと思います。

最後に、本学図書館報に、機関リポジトリの紹介記事を掲載したので、ご紹介します。恥ずかしながら、ご覧いただければ大変嬉しいです。

西南学院大学図書館報No.178

http://www.seinan-gu.ac.jp/library/publication/publication_index.html

講義資料：梶内氏【東日本】<http://id.nii.ac.jp/1280/00000086/>
岡本氏【西日本】<http://id.nii.ac.jp/1280/00000102/>
（公開準備中）



TOCHINAI Lab

理系研究者と機関リポジトリ
図書館に期待すること

梶内 新
北海道大学
北方生物圏フィールド科学センター生物多様性領域
E-mail: stochina@gmail.com

東北学院大学：2015年2月20日（金） 10:50-11:30（40min）
岡山大学：2015年2月27日（金） 13:40-14:10（30min）

KNOWLEDGE SCIENTIFIC OPEN ACCESS

ACCESS

機関リポジトリのこれから

杉田茂樹（千葉大学附属図書館）
機関リポジトリ新任担当者研修 平成27年2月27日 岡山大学

学位規則改正と機関リポジトリ（東日本会場のみ）

講師：林 和宏氏（名古屋工業大学附属図書館）

寺崎 宏美
（山形大学・東日本会場受講）

東日本会場の最後の講義は名古屋工業大学の林和弘氏による、平成25年4月学位規則改正が機関リポジトリ業務へ及ぼした影響についてです。この改正により、博士論文の公表が印刷媒体から原則インターネット公表に切り換わることとなり、機関リポジトリの負う期待と責務も大きくなったため、本研修の中でも特に注目された講義であったと思われます。

機関リポジトリ担当者が留意しておかなければならない事項として、学内の関係規則が改正されているか、学位授与申請者へどのように周知するか、博士論文提出に関わる部署との摺合せ、自動収集に対応する機関リポジトリの整備などがあげられました。今後の課題として、著作権処理についてどこまで図書館が関わるのか、公表できない場合の対応などがあげられましたが、最も肝要であるのは、これらの業務に関係する学生、教員、および学内他部署との、十分な情報共有であることが確認できました。図書館の業務として機関リポジトリを運営している担当者にとっては、今まで意識していなかった問題を想定して考えておく必要が多いと分かり、本研修で悩みを共有し今後とも相談できる道筋をつけられたことが、大きな収穫となりました。

講義資料：<http://id.nii.ac.jp/1280/00000096/>

機関リポジトリのこれから（西日本会場のみ）

講師：杉田 茂樹氏（千葉大学附属図書館）

波多江 貴子
（名古屋工業大学・西日本会場受講）

この科目では、千葉大学の杉田茂樹氏が、機関リポジトリの「これから」は、「研究データのオープンアクセス」にあるという講義をされました。月刊DRFでも、図書館総合展で開催されたフォーラム「大学の知の発信システムの構築に向けて」が紹介されていますし、本学学内でも研究データを10年保存しないといけなくなるらしいという話が聞こえるようになり、気にはなっていました。まだ自館の業務として実感がわかないといったところでした。今回の講義では、データアクセスの方策として、出版社がCHORUSを、図書館側がSHAREを提案しているという米国の動向が紹介されました。データの分野でも出版者の占有は許さないという動きがあるのねと感心しました。講義内で触れられた内閣府の「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」が3月で終了し、そろそろ各大学も対応に動き出す頃でしょうか。千葉大学の機関リポジトリでは公開した論文に付随するデータの登録を開始されるとのことですので、参考にさせていただきながら、今後の動向に注視したいと思っています。

講義資料：<http://id.nii.ac.jp/1280/00000101/>

図書館員が学術論文のコピーエディティングを行うのはどうか？

How about librarians copyediting scholarly articles?

グリーンOAでは、通常、出版社が電子ジャーナルとして有料で提供する学術論文の最終版をリポジトリで公開することはできない。公開できるのは、査読による修正は反映されているものの、あくまで著者の原稿である。それでは著者の最終原稿と出版社版で何が違うかと言うと、体裁が整えられる他、編集者による最終チェックに伴う訂正が入るのである。

この編集者のチェックのことを英語でコピーエディティング(copyediting, copy editing)と言う。ぴったりあてはまる日本語はないようで、ウィキペディアでも英語版の“[Copy editing](#)”に対応する日本語の項目はない。[校正](#)とは少し違い、校正刷りが出来る前の段階で、スペルや句読法、文法のミスばかりでなく、執筆要領に沿っているか、読者のレベルに合った言葉遣いがなされているか、さらには事実関係に誤りがないかといったことなどをチェックする。これらは査読では見ない、あるいは見過ごされがちな事柄であり、出版社が付加価値を主張するゆえんである。

そして、この付加価値を重視する研究者もいる。3月末、SCHOLCOMMメーリングリストに投稿された[記事](#)によれば、[カンザス州立大学](#)ではトップレベルの教員の一人が、コピーエディティングの重要性に言及しつつ、自分のすべての著作が原稿の形で保存されるより10%だけでも出版社版で保存される方がいいとまで言い、多くの教員がこれに賛成しているとのことである。この投稿者は続けて、それなら自機関の研究者に対するサービスとして、図書館員がコピーエディティングを行うのはどうか、と問いかける。

これに対して、実際に学位論文を[ブロクレスト](#)に送付する前にコピーエディットしているし、大学で発行しているOA誌の編集委員になっている図書館員もいるという肯定的な[投稿](#)や、図書館員にそんな時間があるのか、また特別なスキルが要求され、誰でもできる仕事ではな

いという懐疑的な[コメント](#)が寄せられた。新聞のコピーエディターをしていたという[ブロック大学](#)の図書館員は、コピーエディティングは確かに訓練を要する特別なスキルだが、一般に図書館員よりも低賃金の仕事で、これを請け負うのは自らの価値を落とすことになりかねない、と言う。それより、コピーエディティング自体は非専門職のスタッフを雇うなり外注するなどして提供する出版サービスを構築した方が図書館にとって生産的だとする。これなどは図書館専門職が確立している北米ならではの[意見](#)だろう。

先のカンザス州立大学の投稿者からは、コピーエディティングによる修正の著者原稿への反映を認めさせるよう出版社に働きかけてはどうかという再度の[問題提起](#)がなされたが、以後、議論は少しずつ、すべての研究成果を収録する高機能情報ポータルall-scholarship repository (ASR)（「全学術研究リポジトリ」とでも訳せばいいのだろうか）の[構想](#)へと移っていく。[ResourceSync](#)という新たな仕組みも紹介されて、これはこれで面白いのだが、また別の話である。

ちなみに、この一連の議論のそもそもの始まりは、機関リポジトリに教員の著作を収録する際、どういった許諾の手続きを取っているのか、という素朴な[質問](#)だった。教員の業績リストや文献データベースを元に対象論文を同定し、出版社のポリシーを確認して著者からも許諾を得るといった煩雑な作業をやっているのだが、原稿を渡してくれない著者も多いという[話](#)から、上記のような図書館員によるコピーエディティング請負の提案になったわけである。

栗山正光

首都大学東京学術情報基盤センター教授
デジタルリポジトリ連合アドバイザー

【Researchmap】 <http://researchmap.jp/read0195462>

次号
予告

[特集]アイデア一つで講習会～研修・講習会開催報告～、DRF新年度体制紹介、ほか

[連載] かたつむりとオープンアクセスの日常

読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/> 月刊DRF第64号 平成27年5月1日発行 デジタルリポジトリ連合

